

滿洲航空ニ關スル件

帝國政府ハ夙ニ滿蒙ノ航空權獲得ノ急務ナルヲ認メ昭和五年十一月八日ノ閣議ニ於テ本件ニ關シ支那側當局ト交渉開始方ヲ決定シ右ニ基キ張學良政權ヲ相手ニ日滿合辦ノ航空會社設立方等ニ付交渉ヲ重ネタル力遂ニ實現ニ至ラス其ノ儘客年九月ノ滿洲事變ニ及ヒタリ事變後帝國政府ハ客年十一月九日ノ閣議ニ於テ滿蒙ニ於ケル航空權獲得ノ基礎ヲ確立シ併セテ關東軍隸下部隊相互ノ連絡ヲ確實ナラシムル爲軍連絡ノ名義ノ下ニ不取敢日本航空輸送株式會社ヲシテ大連、奉天、長春間及ヒ京城平壤奉天間ニ定期航空ヲ開始セシムルコトヲ決定シ爾來右ニ基キ軍事飛行ノ名義ニ依リ當面ノ要求ニ應シ來リタル次第ナル處滿洲國ノ出現ニ伴ヒ四圍ノ狀況我方ニ有利ニ進展シ來

四庫全書

料左申人

料

[illegible]

滿洲航空ニ關スル件

七八一〇
青木一男君

（以下は、右ページの文字が非常に淡く、ほとんど読み取れない。縦書きの文章であることが推定される。）

リタル今日ニ於テハ右軍事飛行ヲ常設の事業機關ニ引繼キ以テ之ニ
恒久性ヲ與フルコト肝要ト認メラル
而シテ滿蒙ニ於ケル航空ノ經營ハ歐亞連絡航空ノ完成、産業ノ開發
支那本部ニ對スル航空權獲得ノ準備等帝國航空政策ノ遂行ニ資スル
ノ考慮ノ下ニ遺憾ナキヲ期スルヲ必要トスヘキハ勿論ナルモ同時ニ
滿蒙ノ特殊の位地ト情勢トニ鑑ミ國防上ノ要求ニ吻合セシムルヲ以
テ最大ノ方針ト爲ササルヘカラス從テ前記事業機關ハ帝國政府ノ完
全ナル指導監督ノ下ニ之ヲ經營セシムルコトヲ絶對必要トスルモ一
面對滿對外等ノ關係ニ鑑ミ之ヲ滿洲國法人タル日滿合辦會社トナシ
其ノ實質的の指導並監督權ヲ我方ニ把握スルヲ適當トスヘク又本航空
事業ハ其ノ本來ノ使命ニ鑑ミ將來更ニ其ノ擴張ヲ豫期セラルルモ其

ノ實現ヲ成ルヘク容易且迅速ナラシムルノ必要アルヲ以テ此ノ際補助金トシテハ不取敢滿洲國政府及滿鐵ヨリ之ヲ支給シテ事業ヲ開始スルコトトシ左記ノ通措置スルコトト致度

記

滿洲ニ於ケル航空事業ハ帝國國防上ノ要求ニ吻合セシムルヲ以テ施設並經營ノ根本方針トシ併セテ帝國航空事業ノ進展及滿洲國ノ經濟發展ニ資スルモノトス

ハ滿洲國ニ於ケル航空事業ハ獨立ノ日滿合辦株式會社（以下滿洲航空會社ト假稱ス）ヲ組織シ其ノ施設及經營ニ當ラシム

三 滿洲航空會社ノ資本金ハ差當リ金參百五十拾萬圓トシ其ノ豫定出資區分次ノ如クニシテ當分無配當トス

満洲國政府ハ其ノ収入不足ヲ補フ爲補助金ヲ必要トス其ノ豫
 定支出區分次ノ如シ
 満洲國政府
 大同元年 銀四十萬圓
 同 二年 銀百萬圓
 同 三年 銀百四十萬圓
 同 四年以降 銀百七十萬圓

満洲國政府

金百萬圓

(飛行場、中間着陸場等ノ現物出資)

南滿洲鐵道株式會社

金百五十萬圓

民間

金百萬圓

満洲航空會社ハ其ノ収入不足ヲ補フ爲補助金ヲ必要トス其ノ豫

定支出區分次ノ如シ

満洲國政府

大同元年

銀四十萬圓

同 二年

銀百萬圓

同 三年

銀百四十萬圓

同 四年以降

銀百七十萬圓

南滿洲鐵道株式會社

昭和七年度以降昭和十六年迄十年間毎年金五拾萬圓

四 滿洲航空會社ノ指導監督並有事ノ際ニ於ケル管理權ハ滿洲國政府

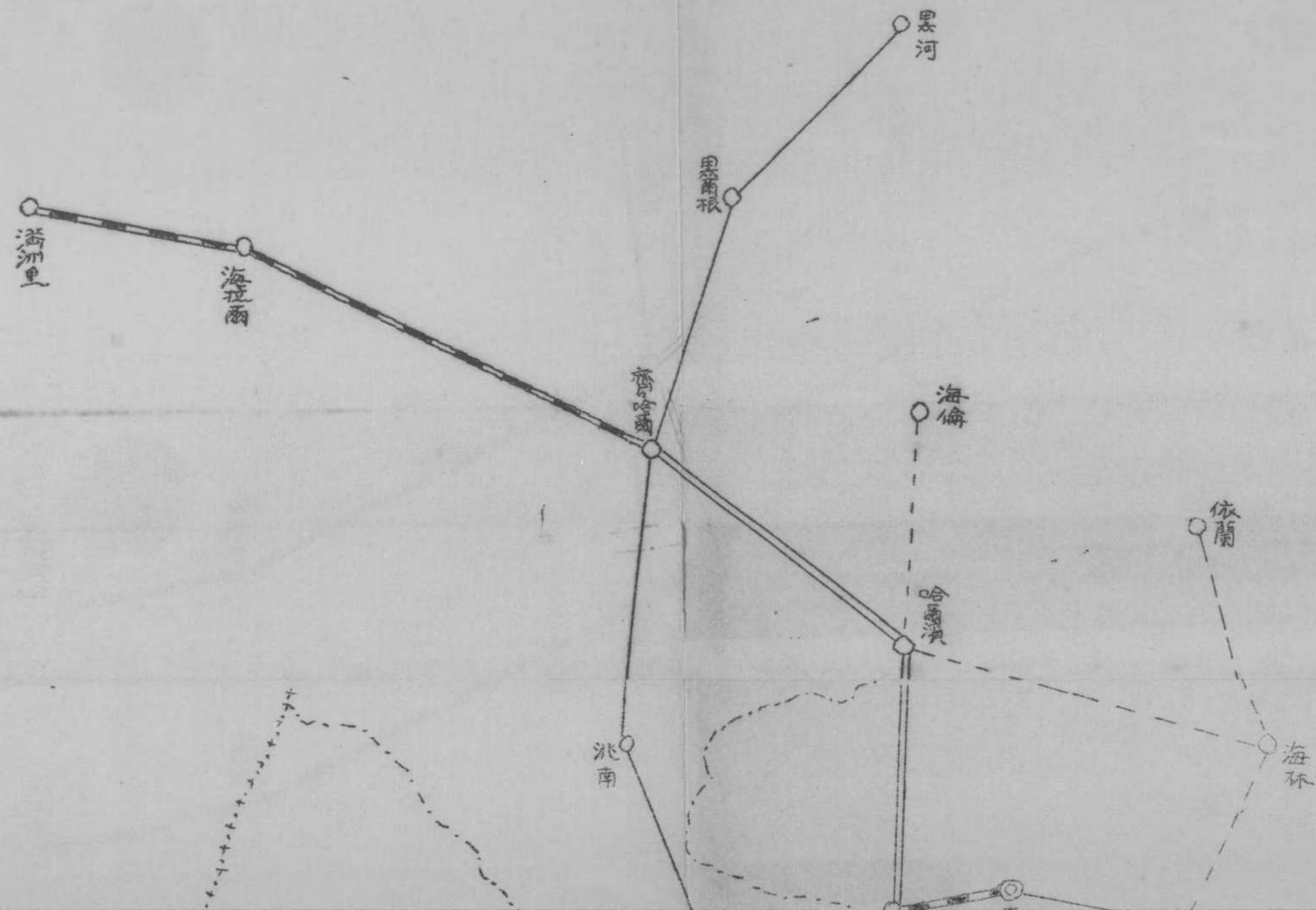
ヨリ駐滿帝國最高機關（過渡的ニハ關東軍司令官）ニ委託セシム

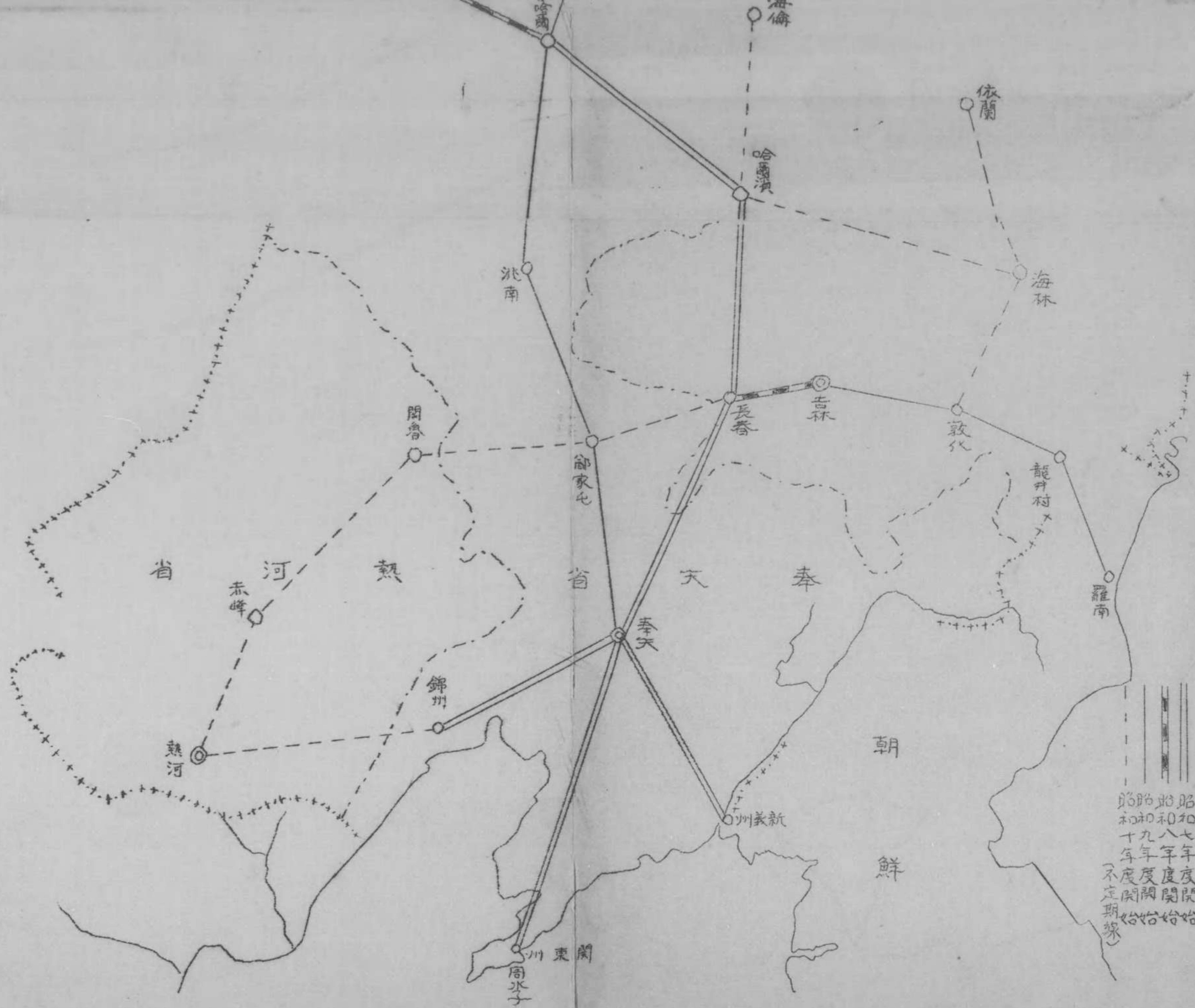
五 滿洲航空會社ノ豫定航空路並之方施設順序別紙票圖ノ如シ

六 滿洲航空會社ハ航空機ノ修理及機體ノ製造組立ノ爲舊奉天航空工

廠ヲ利用ス

圖 要 路 空 航





昭
和
七
年
度
開
始
(不
定
期
線)

昭
和
八
年
度
開
始

昭
和
九
年
度
開
始

昭
和
十
年
度
開
始